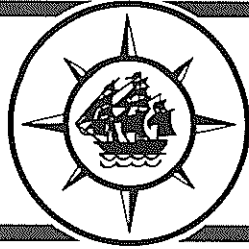


Operation Raleigh News



Operation Raleigh

DENSO

No.37

昭和62年(1987)11月10日(火)
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

マレーシア・フェイズ帰国アンケート

印象に残った村人たちとの共同作業

7月から9月までの3ヵ月間マレーシア・フェイズに参加していた飯島京太君と志邨建介君が帰国後アンケートに回答してくれました。

英語に苦勞、でも同じ人間どうし

—— ORへの当初のもくろみは？

飯島 学生時代のうちに何かひとつ有意義なことをしようと思って。

志邨 外国人とのコミュニケーション、文明からかけ離れたところでの生活を体験したかった。

—— 帰国後のORへの評価は？

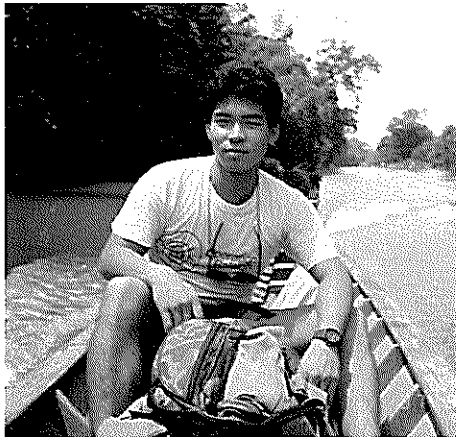
飯島 感謝の一言に尽きます。

志邨 Brilliant!

—— 苦勞したことは？

飯島 英語です。とにかく彼らの英語は早すぎて困った。

志邨 コトバです。



▲ボートで移動中の志邨君

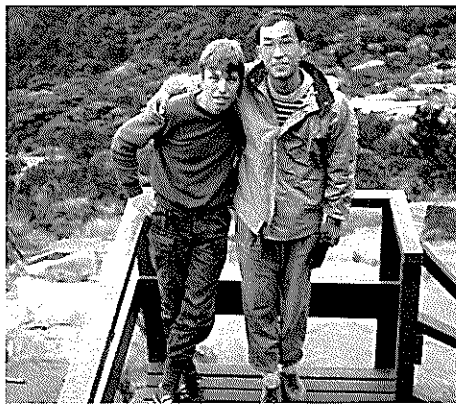
—— 楽しかったことは？

飯島 多すぎて答えきれない。

志邨 パーベキューパーティー、ディスコでの大さわぎ……。

—— 異国人とのふれあいで感じたことは？

飯島 同じ人間だと思いました。



▲外国人ベンチャーと飯島君

志邨 言葉の問題さえクリアすれば、彼らとの共同生活は決して難しいものではないと思いました。

—— 印象的だったことは？

飯島 英国人の看護婦サラが私を医療スタッフのひとりとして扱ってくれたこと。

志邨 ダナム・バレイでのジャングル踏破です。

—— 有意義だったことは？

飯島 サパー州タンブナンでの奉仕活動。村人と一緒に働いたこと。

志邨 ランビア国立公園でのタワー建設。

—— 事前にマスターしておきたかったことは？

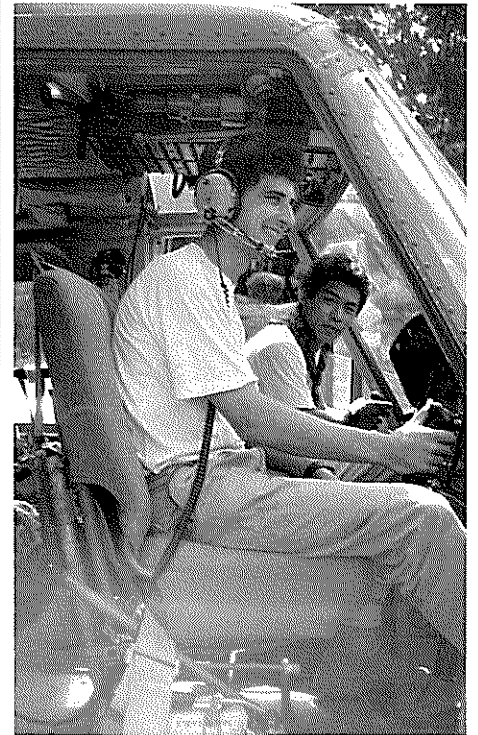
飯島 何とんでも英語の聞きとりをやっておけばよかった。

志邨 日本の自然、社会、習慣などについてもっとよく説明できるようにしておけばよかった。さらに「日

本のジョーク」をいくつか混ぜて英語でしゃべれるようにすること。——日本人と外国人との大きな違いは？

飯島 基本的には、同じだと思います。

志邨 外国人はものごとを楽しむということにける熱意がすごい。



▲ヘリコプターに乗った志邨君

—— 協賛企業・日本電装への外国人たちの反応は？

飯島 みんな日本電装のフルスポンサーに驚いていました。デンソーの名前はみんなよく知っていますが必ず「What do they produce?」と聞かれました。そのたびに詳しく解説しました。

志邨 「Good company」といっていました。



▲竹と籐でつくったハウスの前で村人たちと記念撮影(タンブナン)



▲屋根をつくる飯島君

写真特集 マレーシア・フェイズ

竹や籐での建物づくり
洞窟調査やキナバル登山
有意義だった3カ月間の旅



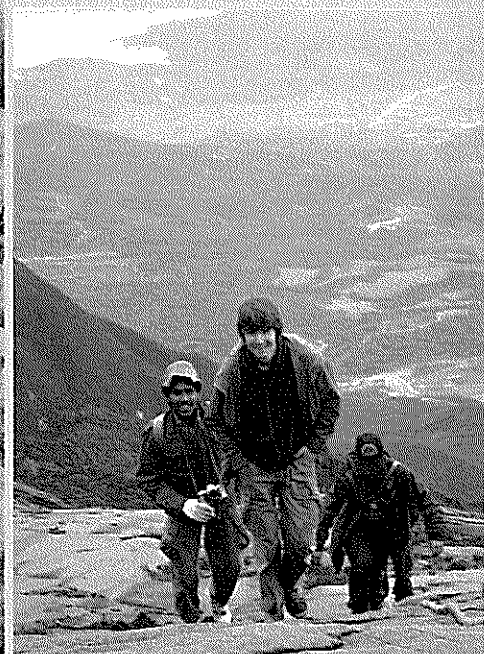
▲バウ洞窟の内部



▲イタリア人ベンチャラーとキナバル登山



▲キナバル山頂近くでちょっと休憩



▲もう少しでキナバル山頂



▲外国人ベンチャラー達と記念撮影



▲オランウータンを抱く

マレーシア各地で奉仕や冒険 タイヤで魚礁・サンゴ礁調査も

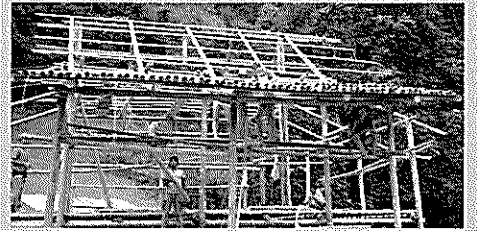
以下はマレーシア・フェイズに参加した飯島京太君、志邨建介君たちの活動報告を英国本部からの週報などからまとめたものです。

サバ州のサバではサバ基金（現地の人々の生活を豊かにすることを目的とした団体）の指導のもとで、古いタイヤやコンクリートを使って人工魚礁を建設しました。この人工魚礁は海底に沈められ、サンゴの成長を助けたり、魚類のすみかになります。これは観光ダイバーにとっても魅力的なものになります。

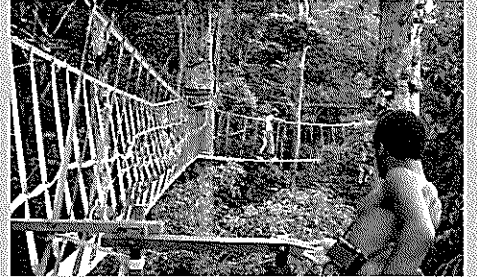
半島のティンギ島、シブ島、ラワ島などでは、ダイビングでサンゴ礁の調査を実施しました。これらの調査はマレーシア水産省からの依頼で行なわれたもので、この地域をマリナーパークにするための予備調査でした。

のあと、科学者たちの調査用に永久的な小屋を造りました。

タンブナンでは、竹や籐など現地にある建材を使って、現地の人々とともに役場などの建物の改善を行いました。また、健康や子供のしつけなどの相談も実施しました。このように現地の人々と親しく交流したため、ベンチャラーたちはマレーシアの人々の暮らし方をよく理解できたようです。



▲竹や籐で家をつくる



▲ジャングルに空中道をつくる

もっとも冒険的だったプロジェクトは、パウ洞窟の調査でした。これは将来の観光資源としても有望でした。ベンチャラーたちは地元の協会や森林局のためにパウ洞窟を観光客に公開するためのレポートを編集しました。また、新しく発見した洞窟にはメガ、ゴールドマイズ、ロードントなどという名前をつけました。

それに加えて、モンコボ山登頂に成功。また東南アジア最高峰キナバル山(4,101m)の東稜新ルートを開発しました。

なお、マレーシア・フェイズでは83人のダイバーによって、延べ2579回のダイビング、延べ1400時間の水中滞在が記録されました。



▲ダイビングに向かうベンチャラーたち

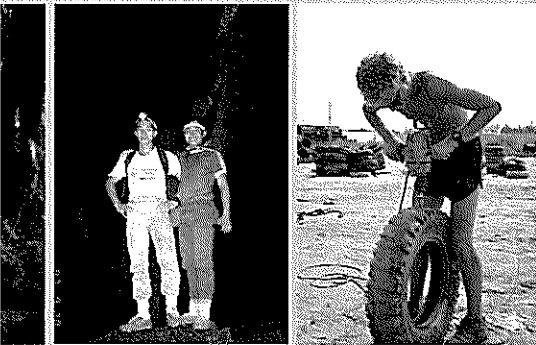
ランカンでは、ベンチャラーたちは現地の人々のためにプレハブ式の木造住宅を組み立てました。またニアでは、3kmもの距離のジャングルの中、建築資材を運びました。耕作されていない土地の改良を進め、さらに周辺にレクリエーション施設をつくるためでした。

サラワクのランピアではジャングルに空中道をつくりました。これは科学者たちが天がい生活の研究に使うものです。

ダナムでは17kmのジャングル踏破

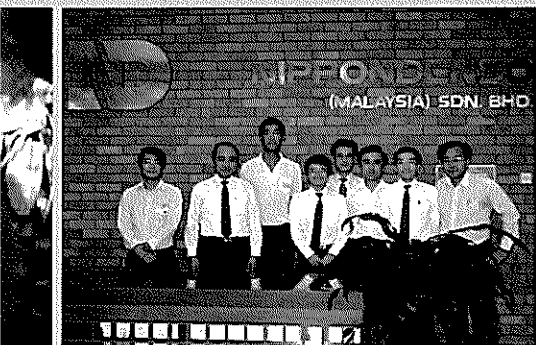


ジャングルに空中道をつくる



▲洞窟内で

▲タイヤで魚礁づくり



▲マレーシアデンソーを訪問

日本代表派遣青年のページ

「爬虫類」三昧のセラム島

インドネシア・フェイズの大塚さん

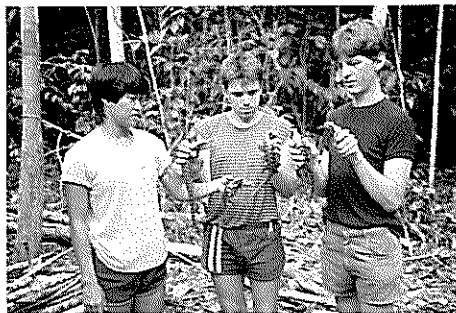
インドネシア・フェイズに参加の大塚聡子さんから9月26日付で送られてきた手紙の抜粋です。

珍しいヘビやトカゲ

8月の後半は午前、夜と毎日爬虫類とカエルの調査を続け、私も何匹かのヘビやトカゲをつかまえてきました。9月に入っても、私はそのまま爬虫類のプロジェクトを続けることにしました。キャンプ近くにはセラム島で一種類だけいるという毒ヘビもいますので、見つけるたびにベンチャーラーに注意が与えられています。ある日、調査場所へ歩いて行く途中、ヘビがいましたのでつかまえてやりましたが、なかなかすばしっこいヘビでした。やっとつかまえて、名前を聞くとフライング・スネークというヘビでした。逃げるとき木から木へグライダーのように飛び移ることができるのです。私が追いかけるのを見たある科学者にいわせると、ヘビが飛んでいるのではなく私が飛んでいるようだったとか…。生き物に接していると、いろいろなハプニングがあり、なかなか楽しいものです。



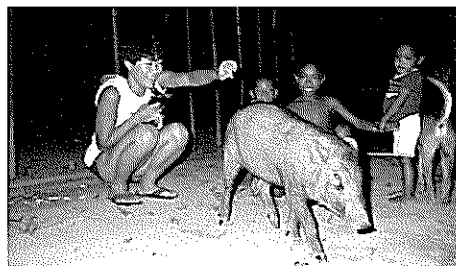
▲2mのヘビをもつ大塚さん



▲トカゲの仲間をつかまえる

2日がかりの船旅

9月18日にはワハイにもどって、21日までは海辺のトカゲやヘビ調査をしました。この後パサハリヘクロコダイル狩りに行けるはずでしたが計画が流れ、24日ワハイ発の船でアンボンに向かいました。



▲イノシシと遊ぶ大塚さん

船はチャーター便ではないため、途中たくさんの村に寄ります。村には船着き場がなく、カヌーで荷物を運ぶため、たっぷり時間がかかります。あまり快適な船旅とはいえませんが、船長や普通のインドネシア人と友達になり、言葉は通じないものの、いろいろと親切にしてもらいました。年配の人は戦時に日本語を習ったのか、簡単な日本語で話すこともできました。寝るときは船の一番下の板の上でザコ寝ですが、結構よく眠れました。朝は船の中なのに、なぜかコケコッコという鳴き声で起こされます。村人が鶏、牛、山羊を積み込んでいて、山羊などは通路に乗せているため、寝床にぬっと顔を出すほどで、人も動物もごちゃまぜでした。

アンボンには9月26日朝到着。ここでは何ヵ月ぶりかでホテルのベッドで寝ることができます。まだ日本人ベンチャーラーは誰もアンボンに着いておらず、少し暇なのでショッピングをしたりするつもりです。日本に帰るまで残り少ない日々をインドネシアで楽しもうと思っています。これもORJ Cと日本電装の皆さんのお蔭だと心から感謝しています。

(9月26日/大塚聡子)

英国本部NEWS

英国本部からのOR週報10月21日号は次のようなニュースを伝えています。

【パキスタン】道路づくりの奉仕プロジェクトは悪天候にもかかわらず順調に進んでいます。昼頃仕事を終えたベンチャーラーたちはその後の自由時間を岩登りやトレッキングをしたり、現地の人々の社会生活に仲間入りしたりしています。彼らはパキスタン人のコックによって用意されたものを食べ、パキスタンの伝統的な文化を体験しています。パサーでの科学プロジェクトは雨や雪のため活動がやや制約されていますが、植物学調査が中心です。冒険旅行プロジェクトはすでに約半数が活動を終わっていますが、約3フィートの積雪のため残りの半数はルートを変更せざるをえなくなっています。

パキスタン・フェイズ

快適な科学キャンプ

9月からパキスタン・フェイズに参加している熊谷正紀君と村上由香里さんからのハガキです。

ここパキスタンの北部パサーのサイエンスキャンプは快適そのもの。みな元気いっぱいです。メジャーをもって山に登ったり、チョウやトカゲを捕えたりしています(村上)。

実はぼくはこのごろゲリです。牛か羊の渡る川の水をピュリタブ(浄化装置)なしで飲んでしまったからです。こちらでは毎食、カレーであります。帰ったら、パキスタン料理を作って、ごちそうしたいと思いません(熊谷)。